論文

光源氏の女君批評

上野辰義

〔抄録〕

藤壺宮は光源氏にとって公私にわたる重要な人物であるが、彼女を光源氏は自分の中でどのように位置づけていたのか、それは彼女に関する光源氏の思い、批評を逐っていくことで形としても明確になると思われる。

キーワード　源氏物語、光源氏、藤壺宮、女君批評、紫上

はじめに

源氏物語の主人公光源氏は、多くの女性たちと交渉しながら、彼女らについての批評を、自身あるいは気の許せる相手に開陳・述懐している。これらは、光源氏がそれらの女性との交流をどう認識・評価していたのか、さらに光源氏自身の価値観、人格・性格の如何、源氏物語の本質ということに繋がっている。そうした重要な問題と考えられるが、いまだ十分に意識されて考察されていないように見受けられるので、試みてみたい。といっても、光源氏と関わった女性は数多いので、本稿では藤壺宮に対する光源氏の批評について考察する。藤壺宮は、言うまでもなく光源氏の女性遍歴の基となっているからである。他の女性批評を見る上での基軸になると思われる。

一　理想の女性

藤壺宮は、三歳で母桐壺更衣を喪いその面影も知らぬ光源氏の父桐壺帝の妃、光源氏の「継母」的な存在として登場する。「御容貌ありさまあやしきまでぞおぼえたまへる」（桐壺二五頁）[注] 母更衣に瓜二つの若い内親王で、光源氏より五歳年長、入内当時光源氏は九歳・十歳とみられるから、藤壺宮は、十四・五歳であった。その藤壺宮を光源

氏は、「若き御心地にいとあはれと思ひきこえたまひて、常に参らまほしく、なづさひ見たてまつらばやとおぼえたまふ」（桐壺二六）と、親しみを抱いたが、評価として最初に確認できるのは、その後、光源氏が十二歳で元服し、左大臣の娘でいとこにあたる葵上と結婚してから「心の中には、ただ、藤壺の御ありさまをたぐひなしと思ひきこえて、さやうならむ人をこそ見め、似る人なくもおはしけるかな」（桐壺二八）と、藤壺宮に妻の理想像を見るようになった箇所である。この段階で藤壺宮のさまとして述べられているのは、故更衣に瓜二つの美人ということ「ありがたき御容貌人」（二五）・「名高うおはする宮の御容貌」（二六）の他は明示されない。貴族的教養・マナー・流儀の具備は当然なのだろうが。幻巻での光源氏五十二歳時の言辞「をかしかりし御ありさまを幼くより見たてまつりしみて」（九五七）とあるのも、これを核にしている。幼童期の光源氏にとっての藤壺宮の理想性は、この程度で理解しておくべきだろう。

その後、十七歳（花鳥余情説では十六歳。以下括弧内の年齢も同説）の夏五月雨の夜に宮中の曹司桐壺で行われた女性論議「雨夜の品定め」の終り近く、藤式部丞による蒜食いの女の体験談を受けて、佐馬頭のまとめ、

よろづのことに、などかは、さてもとおぼゆるをりから、ときどき思ひわかぬばかりの心にては、よしばみなさけだたざらむなむ、めやすかるべき。すべて、心に知れらむことをも知らず顔にもてなし、言はまほしからむことをも、一つ二つの節は過ぐすべくなむあべかりける」

全てに関し、状況をわきまえて機智や風流を控え、知識をひけらかさず、抑制がちに発言をするのがよいとの発言を聞いて、光源氏は、

君は人ひとりの御ありさまを心の中に思ひつづけたまふ。これに、足らず、またさし過ぎたることなくものしたまひけるかなとありがたきにも、いとど胸ふたがる。（帚木五一）

と、藤壺宮を思い、この定めに過不足なく合致すると判じ、その希少さに感激する。これは、物心がついて以来の継続的に藤壺宮と、他の女性たちとに接触してきたうえでの認識と見られる。十二歳桐壺巻末での理想性は主に外見容貌に重点のあるものであったが、これは、内面に重点のあるものであることが注意される。

こうした理想性は、若紫巻の密通時にも、

宮もあさましかりしを思し出づるだに、世とともの御もの思ひなるを、さてだにやみなむと深う思したるに、いと憂くて、いみじき御気色なるものから、なつかしうらうたげに、さりとてうちとけず心深う恥づかしげなる御もてなしなどのなほ人に似させたまはぬを、などかなのめなることだにうちまじりたまはざりけむと、つらうさへぞ思さるる。（若紫一二七）

と、自己の内心と相手への対応の微妙なバランスが、光源氏を一層惹きつけてしまうのである。また、紅葉賀巻頭朱雀院行幸試楽における光源氏の青海波舞姿に、光源氏の贈歌に答えて、藤壺宮も、

目もあやなりし御さま容貌に、見たまひ忍ばれずやありけむ、

「から人の袖ふることは遠けれど立ちゐにつけてあはれとは見き

おほかたには」とあるを、……　（紅葉賀一七一）

と、答歌・返事をする。これに対し、光源氏は、「限りなうめづらしう、かやうの方さへたどたどしからず、他の朝廷まで思ほしやれる、御后言葉のかねても、とほほ笑まれて、……」（紅葉賀一七一）と、大陸事情に思いをはせた藤壺宮の見識に、中宮としての風格を予見した。これも藤壺宮の理想性の一面である。

こうした状況は藤壺宮の立后後、出家後も、距離感に変化は生じるが、基本的には変わらない。光源氏の須磨下向前、藤壺宮に挨拶に訪れた際に、

なつかしうめでたき御けはひの昔に変はらぬに、つらかりし御心ばへもかすめ聞こえさせまほしけれど、今さらにうたてと思さるべし。　（須磨二八五）

とあるのはその一例である。「つらかりし御心ばへ」というのは、藤壺宮出家前の光源氏の私的思いに対する拒絶態度である。

二　他の女君との比較―心中思惟と語り手

こうした藤壺宮の理想性に変化が出て来るとしたら、他の女性との比較の始まりであろう。比肩のない絶対的な理想性から、比較対象の存在する相対的な性格を持つ女性への変化である。

まず、桐壺更衣との比較は桐壺院によるものなので省略するとして、紫上との比較は、若紫巻北山での最初の垣間見時には、

つらつきいとらうたげにて、眉のわたりうちけぶり、いはけなくかいやりたる額つき、髪ざしいみじううつくし。ねびゆかむさまゆかしき人かなと目とまりたまふ。さるは、限りなう心を尽くしきこゆる人に、いとよう似たてまつれるがまもらるるなりけり、と思ふにも涙ぞ落つる。　（若紫一一四）

と、外見・容貌の酷似で、成女と童女という年代差があるばかりだが（葵巻で、葵上の四十九日後、紫上と久々に対面した時も同趣）、賢木巻の接近時には、

髪ざし、頭つき、御髪のかかりたるさま、限りなきにほはしさなど、ただかの対の姫君に違ふところなし。年ごろすこし思ひ忘れたまへりつるを、あさましきまでおぼえたまへるかなと見たまふままに、すこしもの思ひのはるけどころあるここちしたまふ。気高う恥づかしげなるさまなども、さらにこと人とも思ひわきがたきを、なほ、限りなく昔より思ひしめきこえてし心の思ひなしにや、さまことにいみじうねびまさりたまひにけるかなとたぐひなくおぼえたまふに、……。　（賢木二五〇）

と、二十九歳の藤壺宮は、光源氏が日常的に生活をともにしている十六歳の紫上を基準にして、同じく酷似だが、光源氏の心理的偏向と数年にわたり直接顔を見ることのなかったこととから、藤壺宮の成熟度が意識されて、いまだ「たぐいな」い存在であるものの、比較の基軸は紫上にある。この後、同年末での藤壺宮の落飾、二年後の光源氏の須磨下向を経て、明石巻光源氏二十八歳の秋、帰京に際し、明石御方の弾いた箏の音を聞いて、

入道の宮の御琴の音をただ今のまたなきものに思ひきこえたるは、

いまめかしうあなめでた、と聞く人の心ゆきて、容貌さへ思ひやらるることは、げにいと限りなき御琴の音なり。これは、あくまで弾き澄まし、心にくくねたき音ぞまされる。この御心にだにはじめてあはれになつかしう、まだ耳馴れたまはぬ手など心やましきほどに弾きさしつつ、飽かず思さるるにも、月ごろ、など強ひても聞きならさざりつらむと悔しう思さる。　（明石三三〇）

と、藤壺宮の箏は、容貌まで彷彿とさせる華やかな新鮮さが無比で、明石御方のは、玄人的な巧みな奏法の魅力に優れていた。箏の音に限ってだが、藤壺宮の絶対性・優位性が崩れている。

比較の性格は異なるが、光源氏の須磨の絵日記の行方もこれに準じる。明石入道の願いを聞き入れて明石御方と結婚したものの、都の紫上が気がかりで明石御方へは足も遠のく。そうした状況下で、

絵をさまざま描き集めて、思ふことどもを書きつけ、返りこと聞くべきさまにしなしたまへり。見む人の心にしみぬべき物のさまなり。いかでか空に通ふ御心ならむ、二条の君も、ものあはれに慰む方なくおぼえたまふをりをり、同じやうに絵を描き集めたまひつつ、やがてわが御ありさま、日記のやうに書きたまへり。

（明石三二七）

と、特定の鑑賞者とその反応を意識して、絵日記様のものを作成し、これと通じ合うように都の紫上も同様のものを作成していた。ここでは、光源氏の特定の鑑賞者は紫上のように読めるが、実際に紫上がこの絵日記を目にするのは、それから三年半後、光源氏が都に帰ってからも二年半後の絵合の行事の出品物選びの際であった。そこでは、光源氏の留守を女手一つで守っていた紫上が今になって見ることを恨むのは当然である一方、「このついでにぞ女君にも見せたてまつりたまひける」（絵合三九〇）とか、「中宮ばかりには見せたてまつるべきものなり」（絵合三九一）とか語られて、この絵日記作成の真の対象者は藤壺宮であるように理解される。だが、にもかかわらず、この絵日記によって冷泉帝の御前での絵合に勝利した後、

「かの浦々の巻は中宮にさぶらはせたまへ」と聞こえさせたまひければ、これがはじめ、また残りの巻々ゆかしがらせたまへど、「いまつぎつぎに」と聞こえさせたまふ。　（絵合三九七）

と語られて、一部は藤壺宮に献呈されたものの、残部は藤壺宮の希望に沿わず（見せることは献呈につながるだろう）、光源氏方に保管された。八年後、明石姫の東宮入内の調度として、

御絵どもととのへさせたまふ中に、かの須磨の日記は、末にも伝へ知らせむと思せど、いますこし世をも思し知りなんに、と思し返して、まだ取り出でたまはず。　（梅枝六六八）

とあり、それが、家訓的な家宝として子孫の為に保管されていたことがわかる。この絵日記鑑賞の真の理解者は藤壺宮でありながら、現実の鑑賞者として藤壺宮は完全ではない。他方に紫上や光源氏の子孫たちがいたのである。

こうして、紫上との結婚以後、藤壺宮の崩御以前、藤壺宮は紫上や明石御方との相対的な位置関係にある存在となり、その理想性も相対化されたり弱化したりする。

さらに、薄雲巻での崩御後の藤壺宮は、それ以前は、光源氏の心中

思惟や光源氏に寄り添った語り手の言による相対化であったの対し、それ以降は、光源氏の他者への言辞による比較として表現されるようになる。

そうした理想批評の語り口の移行の過渡的なものが、崩御した藤壺宮への誄であろう。

かしこき御身のほどと聞こゆる中にも、御心ばへなどの、世のためにもあまねくあはれにおはしまして、豪家にこと寄せて、人の愁へとあることなどもおのづからうちまじるを、いささかもさやうなる事の乱れなく、人の仕うまつることをも、世の苦しみとあるべきことをばとどめたまふ。功徳の方とても、勧むるによりたまひて、いかめしうめづらしうしたまふ人など昔のさかしき世にみなありけるを、これはさやうなることなく、ただもとよりの財物（たからもの）、得たまふべき年官（つかさ）、年爵（かうぶり）、御封（みふ）のものの、さるべき限りして、まことに心深きことどもの限りをしおかせたまへれば、何とわくまじき山伏などまで惜しみきこゆ。をさめたてまつるにも、世の中響きて悲しと思はぬ人なし。（薄雲四一二八）

藤壺宮が、女院・国母という公的立場から儒教的な仁徳に適うふるまいをしたことに対する世間的な讃美を語り手が行っている。光源氏個人の藤壺宮崩御に関する批評は哀しみ以外特に示されないが、その公的部分はこの誄に吸収されているのである。私的な部分は隠匿されている。藤壺宮の崩御に公的な讃美批評がなされたことで、これ以降、隠匿されていた光源氏の私的な思いが口をついてなされやすくなったのかもしれない。藤壺宮の公的評価が万人に理想的なものとして定着したからである。光源氏が藤壺宮への個人的思いを口外しうるには、藤壺宮本人が既にこの世に存在しないという点が、より大きな理由ではあったろうが。

三　他の女君との比較―会話中

三十二歳の春三月に藤壺宮を喪った光源氏は、心のバランスを失い、同年の秋に前坊の遺児斎宮女御に、冬に前斎院朝顔姫に接近する。前者の斎宮女御には、母六条御息所とともに伊勢に下向した日以来、関心を持っていた。御代替わりによる母娘の帰京後、他界した御息所の遺言により光源氏は前斎宮を愛人にはせず、その後見者となる。そして出家後女院となった藤壺宮と謀り二人の子である冷泉帝の後宮に前斎宮を納れていた。秋、二条院に退出してきた斎宮女御のもとに、折からの雨に昔のことを思い出し、エモーショナルになった光源氏が訪れ、かつての野宮訪問のことなど語り出して、同じくしんみりとしている斎宮女御に心を動かしながら、次のように言う。

「過ぎにし方、ことに思ひ悩むべきこともなくてはべりぬべかりし世の中にも、なほ心から、すきずきしきことにつけて、もの思ひの絶えずもはべりけるかな。さるまじきことどもの心苦しきがあまたはべりし中に、つひに心もとけずむすぼほれてやみぬること、二つなむはべる。一つは、この過ぎたまひにし御事よ。あさましうのみ思ひつめてやみたまひにしが、長き世の愁はしきふしと思ひたまへられしを、かうまでも仕うまつり御覧ぜらるるをな

む、慰めに思うたまへなせど、燃えし煙のむすぼほれたまひけむはなほいぶせうこそ思うたまへらるれ」とて、いま一つはのたまひさしつ。「中ごろ、身のなきに沈みはべりしほど、かたがたに思ひたまへしことは、片はしづつかなひにたり。東の院にものする人の、そこはかとなくて心苦しうおぼえわたりはべりしも、おだしう思ひなりにてはべり。心ばへの憎からぬなど、我も人も見たまへあきらめて、いとこそさはやかなれ。かくたち帰り、おほやけの御後見仕うまつる喜びなどは、さしも心に深くしまず、かやうなるすきがましき方は、しづめがたうのみはべるを、おぼろけに思ひ忍びたる御後見とはおぼし知らせたまふらむや。あはれとだにのたまはせずは、いかにかひなくはべらむ」とのたまへば、むつかしうて、御答へもなければ、「さりや。あな心憂」とて、

他事（ことごと）に言ひ紛らはしたまひつ。　（薄雲四三二）

昔は好色事を止められず、物思いが絶えなかったが、最後まで心が解放されず鬱屈した思いで終わったものが二つあります、一つはあなたの母君のことで、最後まで私を許していただけず、あなたをこのようにお世話できていることが慰めですが、やはりいまだに心残りです、と言い、もう一つを言い止したが、それが藤壺宮の事だと判断される。光源氏は藤壺宮とも最後まで心を解放できず、心にしこりが残っているのである。続けて、数年前の須磨退居時代は、女御の母六条御息所や藤壺宮をはじめ、かかわりのあった女性たちの世話・援助を十分できずにいて、帰京したらそれを果たそうと思っていた、と、斎宮女御も承知で話題に取り上げるのに障害のない花散里に言及し、彼女がその対象となった理由の性格の良さを述べ、この鎮めがたい好色心の延長線上に、今後見している斎宮女御への思いを吐露した。

ここでは藤壺宮の批評はされていない。ただ、光源氏にとっては胸の中にあり、その存在は、斎宮女御に口頭で示した。紫上より一歳年下、賢木巻の伊勢下向時十四歳であった斎宮女御は、光源氏にとって母六条御息所の体験と対置された「つひに心もとけずむすぼほれてやみぬること」のあと一つとして言い止した体験は何であるのか、世に知られている光源氏の女性関係を想起し、答えを気にしたのではないか。自己でなく母との対比としてである。だから光源氏は答えを明示しなかったが、自身の女性関係回顧の地平で、藤壺宮の存在とその交渉の性格を、はじめて関係者以外の他者に、「つひに心もとけずむすぼほれてやみぬること」として示したのである。

ここではいまだ関係の批評であったが、同年冬、前斎院朝顔姫に、斎院着任から九年の時を経て接近し、紫上を苦しめた際には、藤壺宮自身についての批評を紫上に対してした。若かった時でさえそうだったのに、今はまして光源氏を受け入れようとしない朝顔姫との膠着状態に陥って、身動きも取れなくなった光源氏は、雪の降り積もった夕暮れに、藤壺宮崩御後、太政大臣もいない中、帝の補佐で多忙な日々であると切り出して、朝顔姫との交渉は紫上の誤解であると、紫上を慰める。庭に下ろした童女たちに雪まろばしをさせて、藤壺宮生前の思い出話をする。

「ひと年（とせ）、中宮の御前に雪の山作られたりし、世に古りたることなれど、なほめづらしくもはかなきことをしなしたまへりしかな。

何のをりをりにつけても、口惜しう飽かずもあるかな。いとけ遠くもてなしたまひて、くはしき御ありさまを見ならしたてまつりしことはなかりしかど、御まじらひのほどに、うしろやすきものには思したりきかし。うち頼みきこえて、とあることかかるをりにつけて、何ごとも聞こえ通ひしに、もて出でてらうらうじきことも見えたまはざりしかど、言ふかひあり、思ふさまに、はかなき事わざをもしなしたまひしはや。世にまたさばかりのたぐひありなむや。やはらかにおびれたるものから、深うよしづきたるところの並びなくものしたまひしを、君こそは、さいへど紫のゆゑこよなからずものしたまふめれど、すこしわづらはしき気添ひて、かどかどしさのすすみたまへるや苦しからむ。前斎院の御心ばへは、またさまことにぞみゆる。さうざうしきに、何とはなくとも聞こえあはせ、われも心づかひせらるべきあたり、ただこの一ところや、世に残りたまへらむ」とのたまふ。（朝顔四四九）

先年藤壺宮が雪山をつくられた際も趣向を凝らされていたが、何につけてももういらっしゃらないのが残念だ、私には距離を置かれて詳しくも存じ上げないが、相互に信頼申し上げて、何につけても相談し申し上げた、表立って目立つこともなさられなかったが、理想的にちょっとしたことでも御処置なさっておられました、あれほどの方がほかにおられましょうか、弱弱しくお見えでしたが、深い教養がおありでした、と光源氏は藤壺宮を褒めた。「おびれたる」は精神的な弱さを示して誉め言葉ではないが、上流の女性らしさの表れでもあった（若菜下八一三）。ここでは公的な位相と断りながら、藤壺宮と光源氏との深い信頼関係と、藤壺宮の判断力・教養への過度にも響く賞賛が顕わで、ここだけでも紫上は光源氏の藤壺宮に対する異常な思いを感じ取ったであろう。光源氏は、これに続けて紫上に舌鋒を向け、あなたは「紫のゆゑこよなからず」いらっしゃるが、少し厄介な点が加わって、気の利きすぎるのが難点だ、と戯れに皮肉った。しかし、この「紫のゆゑこよなからず」のことばに、紫上は自分が藤壺宮の何であるか、光源氏にとって藤壺宮が何であったかを利発な彼女は悟ったのではないだろうか。まだ十歳そこそこの少女であったころ、二条院に迎え取られて、光源氏と、

ねは見ねどあはれとぞ思ふ武蔵野の露わけわぶる草のゆかりを
かこつべきゆゑを知らねばおぼつかないかなる草のゆかりなるらん（若紫一四一）

の贈答歌の手習をしていたからである。肉体面までとは思い至らずとも、光源氏にとって自分が藤壺宮の「紫草のゆかり」であることを感知したのではないか。その推測を確実にするかのように、光源氏は、紫上に続けて、今接近して紫上を苦しませている女、朝顔姫に評を進め、彼女はまた藤壺宮や紫上と性質が異なり、気兼ねなく緊張感のある会話ができる唯一の女性だと、褒めた。藤壺宮はここで、光源氏の恋情に関わる「女君」の一人に、紫上の前に堕ちたのである。だから、紫上はこの光源氏の発言を受けて、自分から続けて光源氏の須磨退居の原因にもなった、同じく上流の女である朧月夜の事を取り上げ、光源氏はさらに続けて、彼女らよりランクの落ちる明石御方と花散里に言及し、それぞれの性格と自分にとっての位置を紫上に問わず語りし

た。「いふかひなき際の人はまだ見ず。人は、すぐれたるは難き世なりや」（朝顔四五〇）と口にする光源氏にとって、さらにランクの落ちる末摘花や空蟬はここではもう取り上げられない。

こうして、藤壺宮はここでの光源氏による一連の女君批評の筆頭にいる。藤壺宮崩御後の精神的動揺の中で、后妃・「継母」であった藤壺宮同様、斎宮・斎院という禁忌から解かれた自分と関わりのある上の品の女性に、続けて光源氏は心揺らいだのだが、崩御の年末、その動揺も終息に向かう際、その動揺の根源である藤壺宮亡き後の政治的多忙という口実を使い、紫上の朝顔姫一件への誤解を説き、折しもの雪まろばしから藤壺宮の雪の山の思い出話へと、藤壺宮を筆頭とする幾人もの女性批評へと入っていく。その夜の光源氏の夢に藤壺宮が現れて、紫上に自分のことを漏らしたのを恨んだが、光源氏はそれにより自分との事で藤壺宮が成仏できずにいることを知り、それとなく所々に誦経をさせ、自身も念仏し、藤壺宮を慕う二首の独詠をした。これ以後、藤壺宮は光源氏に折々回想されるものの、霊としても登場することはなくなる。藤壺宮に酷似する姪の紫上が、藤壺宮から自立していくのである。

なお、先の斎宮女御を前にしての藤壺宮言及は、女御の母六条御息所との対比によるもので、実名は秘匿されたのに対し、ここの紫上を前にしての藤壺宮言及は、朝顔姫との件の言い訳が、藤壺宮崩御後の公的な多忙さ、折からの雪による生前の藤壺宮の公的回想という具合に藤壺宮と関わっていることが注意される。藤壺宮に酷似している眼前の姪である紫上を慰めるべく、「紫のゆゑ」心緩んで、公的な意識で藤壺宮に言及したのだが、私的な思いをにおわせるまでに進んで、語るに堕ちたのである。ここが藤壺宮崩御直後にはなされなかった、光源氏による同年末の実質的な私的な藤壺宮への誄になっている。上流の女性としての理想を保持していたことを讃美し、相互に信頼しあい、心が通じていたことを自賛している。

その後も、藤壺宮は明石姫、紫上とともにこの上ない美人であるという認識を光源氏が抱いていることが、紫上付きとなった、かつての夕顔の侍女右近の口を通して語られるが（玉鬘五〇四）、梅枝巻で明石姫の東宮入内の調度として草子どもを整える際、光源氏は紫上を前にして仮名を論じ、

「……、女手を心に入れて習ひし盛りに、こともなき手本多く集へたりし中に、中宮の母御息所の、心にも入れず走り書いたまへりし一行（ひとくだり）ばかり、わざとならぬを得て、際ことにおぼえしはや。さて、あるまじき御名も立てきこえしぞかし。悔しきことに思ひしみたまへりしかど、さしもあらざりけり。宮にかく後見仕うまつることを、心深うおはせしかば、亡き御影にも見なほしたまふらん。宮の御手は、こまかにをかしげなれど、かどや後れたらん」と、うちささめきて聞こえたまふ。「故入道の宮の御手は、いとけしき深うなまめきたる筋はありしかど、弱きところありて、にほひぞ少なかりし。院の尚侍こそ今の世の上手におはすれど、あまりそぼれて癖ぞそひためる。さはありとも、かの君と、前斎院と、ここにとこそは書きたまはめ」と、ゆるしきこえたまへば、「この数にはまばゆくや」と聞こえたまへば、「いたうな過ぐし

たまひそ。にこやかなる方のなつかしさは、ことなるものを。真字のすすみたるほどに、仮名はしどけなき文字こそまじるめれ」とて、まだ書かぬ草子ども作り加へて、表紙、紐などいみじうせさせたまふ。

（梅枝六六二）

と、光源氏の実見し得た女君たちの筆跡を批評した。まず、「際ことにおぼえ」た六条御息所を取り上げ、その関係で娘である秋好中宮（斎宮女御）に言及したが、ついで同じ中宮であった藤壺宮に及んだのは、六条御息所と同様既に故人になっていた女君であるからと見られる。藤壺宮に次いで、朧月夜に言及したのは、朝顔姫と紫上の三人が現在の仮名の名手と光源氏が判断しているからである。明石御方や花散里、玉鬘等に言及していない理由は明確ではない。その中で藤壺宮に関しては、深い趣きがあり優美ではあったが、弱い点があり花やかさが少ない、とした。弱さが生命力を必要とする華やかさの欠如に繋がっているのだろうが、この筆跡の弱さは、前述の朝顔巻冬の雪まろばしの場で、「やはらかにおびれたるものから」と言われていたことと通じる。ともに紫上に向かっての藤壺宮評である。これに対し紫上は、物柔らかな魅力があると褒められた。仮名評であるゆえに、藤壺宮でなく六条御息所から言及が始まり、筆跡の弱さが指摘された点が継続していて、藤壺宮の絶対性は一段と低下していると言える。

その後、若菜上巻に至って、光源氏は自身の四十賀に際し、藤壺宮が健在であるなら自らが率先して奉仕するのに、と不在を残念に思ったものの、若菜下巻の女楽にも当事者の女君達の楽の批評（心中思惟または語り手による）や帝の御前での御遊に加わる男性たちの批評（会話による）はあるが、藤壺宮など故人の楽についての評はない（明石巻で生前の藤壺宮の箏についての評はあった）。これだけ参会者がいる場では、個人・故人への口頭による露骨な批評は避けられたのだろう。実際散会後、紫上には、女三宮の琴の批評と紫上への過去の音楽教育にふれての思いを語っている。

その後、光源氏が藤壺宮に言及するのは、紫上逝去の翌年幻巻の春三月、六条院の女三宮に続いて明石御方を訪れた際であり、それが最後の藤壺宮批評となる。心にくく対応する明石御方に亡くなった紫上を思い、今まで人への執着で出家できずにきたと述懐して、

昔よりものを思ふことなど語り出でたまふ中に、「故后の宮の崩（かく）れたまへりし春なむ、花の色を見ても、まことに『心あらば』とおぼえし。それは、おほかたの世につけて、をかしかりし御ありさまを幼くより見たてまつりしみて、さるとぢめの悲しさも人よりことにおぼえしなり。みづからとりわく心ざしにも、もののあはれはよらぬわざなり。年経ぬる人に後れて、心をさめむ方なく忘れがたきも、ただかかる仲の悲しさのみにはあらず。幼きほどより生（お）ほしたてしありさま、もろともに老いぬる末の世にうち棄てられて、わが身も人の身も思ひつづけらるる悲しさのたへがたきになん。すべてもののあはれも、ゆゑあることも、をかしき筋も、広う思ひめぐらす方々添ふことの浅からずなるになむありける」など、夜更くるまで、昔今の御もの語りに、かくても明かしつべき夜をと思しながら、帰りたまふを、女もものあはれにおぼゆべし。

（幻九五七）

と、語っていく。「昔よりものを思ふことなど語り出でたまふ中に」とは、具体的に何か。若菜下巻の女楽の後で紫上に語っていた「まづは、思ふ人にさまざま後れ、残りとまれる齢（よはひ）の末にも、飽かず悲しと思ふこと多く、あぢきなくさるまじきことにつけても、あやしくもの思はしく、心に飽かずおぼゆること添ひたる身にて」（七八五）によると、肉親など愛する人との縁の薄さがその一つで、藤壺宮との経緯も心にあっただろうが、全貌は不明だ。紫上逝去後の御法巻（九四四）と幻巻（九五二）の光源氏の述懐によれば、愛する人との別れの最大のものは、紫上とのものであった。であるから、ここの明石御方との会話では、そうした愛する人との縁の薄さの話題の中で、父院の后・「義母」であった公人としての藤壺宮の事が語られ、藤壺宮との死別の悲しみは幼くより彼女の素晴らしさに接していたからで、個人的な愛情の如何に因らないと言い、ついで最大の悲しみである紫上との幼少時からの養育教育関係の存在など単なる夫婦関係に収まらない絆に言及していく。聞いている明石御方にすれば、光源氏を中に対照的な位置関係の藤壺宮と紫上への思いの吐露だが、光源氏にすれば、個人的記憶に刻まれた第一・第二の「紫のゆゑ」でつながった二人との死別の哀しみの吐露であった。喪った衝撃の強さ、哀しみの深さからすれば、物語での語られようからも、紫上が中心にいて、藤壺宮は従の位置にいる。

こうして、光源氏による藤壺宮評を逐っていくと、その理想性が完璧なものとして当初意識されていたが、その「紫のゆかり」で藤壺宮への思いの「かの人の御かはりに、明け暮れの慰め」（若紫一一五）ぐさであった紫上が成長して光源氏の妻となり、藤壺宮とは別人格を見せていくにつれ、藤壺宮は相対化されていく。宮の崩御後は、光源氏の父帝の后であり、「義母」であり、紫上の叔母である存在として、光源氏により紫上に向かって藤壺宮批評が語られるようになって、その弱点も言及されるようになる。次第に、そうしてついに、光源氏の女君として紫上が優位に立つのである。しかしながら光源氏の物語退場も近い五十二歳の三月、明石御方に自身の生涯の物思いの極点である紫上喪失を口にするに際し、藤壺宮の喪失体験を先立てていたように、藤壺宮は光源氏にとって紫上との関係からしても、自身の存在の前提だったのである。そのことは生涯変わらなかった。

このように、光源氏による女君批評の様相を逐ってみると、光源氏の思考回路や女君の特質・位置を改めて確認することができ、物語に流れる時の有意性、物語の構造の厳密性も知られてくるのである。

〔注〕

源氏物語の引用は、阿部秋生『完本源氏物語』小学館、一九九二年四月、による。漢数字は頁数。

〔付記〕

拙稿と視点は異なるが、光源氏と藤壺宮の関係を全体的に論じたものに以下の諸論等がある。参照されたい。

清水好子「藤壺宮」『源氏の女君（増補版）』（塙書房、一九六七年）、

森一郎「藤壺宮の実像」（『源氏物語作中人物論』笠間書院、一九七九

年二月）、木船重昭「源氏物語藤壺宮論」（『源氏物語の研究続』大学堂書店、一九七三年十二月）、阿部秋生「藤壺の宮と光源氏」（『文学』一九八九年八・九月）、斎藤暁子「藤壺試論―愛と拒絶の構造―」（『源氏物語の研究―光源氏の宿痾―』教育出版センター、一九七九年十二月）など。

（うえの　たつよし　日本文学科）

二〇二一年十一月一日受理